

# 博士課程教育リーディングプログラム現地視察報告書(平成26年度)

博士課程教育リーディングプログラム委員会

プログラム名称	超大規模脳情報を高度に技術するブレイン情報アーキテクトの育成	申請大学名	豊橋技術科学大学
申請大学長名	大西 隆		
プログラム責任者	井上 光輝		
<p>1. 進捗状況概要</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・プログラムは計画に沿い、全体として順調に進行していることが確認された。申請時には年度あたり5名の学生を受け入れる計画だったものが、10名に倍増され、実際に8名の優秀かつ意欲のある学生が本学位プログラムに参加していることは評価できる。</li> <li>・高専出身者が多いという大学の特徴を生かして、企業側の求める人材像、すなわち、リーダーシップを発揮できる高度な技術者養成に焦点を当てた取り組みになっていることも評価できる。</li> <li>・本プログラムで養成する人材「ブレイン情報アーキテクト」の教育研究のための実験設備や教授陣も整っており、また、産業界も含めた連携先機関との協働関係もしっかり構築されている。</li> <li>・大学全体としての支援体制も十分に整備され、また、2ヶ月間にわたって事前講義や海外キャンパスでの合宿などを行う「グローバルサマースクール」等の制度も整っており、このまま順調に進むことが期待される。</li> </ul> <p>2. 意見(改善を要する点、実施した助言等)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・目標が明確で志の高い学生が本プログラムに参加しているが、一方で、中には途中でドロップアウトするかもしれないという不安を抱えている学生もおり、また、今後計画通りに進むとも限らない。そのような学生に対して、場合によっては既存の専攻に戻る道を用意したり、方向転換を許すためのチェックポイントを設けたりするなど、不安を取り除くための配慮が必要である。</li> <li>・学外や海外の研究者を含めたグループ指導教員制度は機能すれば大変有用なものになりうるが、その反面、無責任指導体制になったり、学生が研究テーマを途中で変更する際の障害になったりする危険もある。指導教員を誰が選ぶのか(教員側か学生側か)、どういう視点で選ぶのか(研究テーマの近さ、遠さ)、どの時期に選ぶのか(最初か、それとも研究が進んでからか)、など本制度の運用については慎重かつ柔軟に対応していただくこととし、今後のモデルケースとなるように努めていただきたい。</li> <li>・連携先機関(例えば、浜松医科大学)の講義を履修できるようになっていたり、あるいは連携先の企業と共同研究できるようになっていたりすることは、学生にとって大きな刺激、活力になっている。しかし、それらの機関等への移動にかかる時間が実験をする時間の確保や単位取得にとって負担になっている面もある。遠隔講義システムの導入や講義の時間割の工夫等、学生の負担を軽減するような配慮が望まれる。</li> </ul>			